

ナザレで受け入れられない

ルカによる福音 4:21-30

(そのとき、ナザレの会堂で預言者イザヤの書を読まれた) イエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか。」イエスは言われた。「きっと、あなたがたは、『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うにちがいない。」そして、言われた。「はっきりしておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。確かにしておく。エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、その地方一帯に大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたが、エリヤはその中のだれのもとにも遣わされず、シドン地方のサレプタのやもめのもとにだけ遣わされた。また、預言者エリシャの時代に、イスラエルにはらい病を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンのほかはだれも清くされなかった。」これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。

説教

故郷の人々はイエスの里帰りを歓迎し、礼拝でイエスに説教を依頼しました。ここには彼らの歓迎の気持ちが表れています。イエスの説教を聞いて「**その口から出る恵み深い言葉に驚き**」非常に喜びました。ところがその後、何かの行き違いからイエスは郷里の人たちを怒らせてしまいます。そして人々から追われ、崖の上から突き落とされそうになりますが、危うく「**人々の間を通り抜けて**」立ち去ります。これが事件の概要です。マルコ福音書では郷里の人々

はイエスにつまづきはするが、殺そうとまでには至りません。マタイ福音書も同様です。ところがルカだけは郷里の人々は憤慨し殺そうとする。これは異常な事態です。その結果イエスは故郷を出て「カファルナウムに下る」(ルカ 4:31) ことになります。

さて本日のテキストは何度読み返してみてもよく分からない点があります。郷里の人たちがイエスを殺そうとするに至った理由がはっきりしません。というよりも、はっきりはしているが、それが本当かという疑問があります。要するに郷里の人々はイエスの 23 節から 27 節の言葉に憤慨したのです。

イエスは言われた。「きっと、あなたがたは、『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うにちがいない。」そして、言われた。「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。確かに言っておく。エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、その地方一帯に大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたが、エリヤはその中のだれのもとにも遣わされな
いで、シドン地方のサレプタのやもめのもとにだけ遣わされた。また、預言者エリシャの時代に、イスラエルには重い皮膚病を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンのほかはだれも清くされなかった。」 23-27

「ヨセフの子」といったイエス返事がこれです。1 をいったら 10 返されています。よく聞け、預言者エリアもエリシャもユダヤ人は癒さず、非ユダヤ人を癒した、これじゃ怒るのもあたりまえでしょう。そもそも受け答えになっていません。だからこそ本当にそんなことをイエスが言ったとは思えません。これがこのテキストの真相だとおもいます。

<なぜイエスは切れたのか>

小さいころからよく知っているイエス坊主がこんなに立派になって帰ってきた、なにはともわれ、めでたいことだ。こんな通俗的なイエス理解に対してイエスが強烈に拒否をした。もしイエスがここでそうなんです、おじさん、

わたしは神の愛を説き、あなたたちを救うために故郷に戻ってきたのです、なんて受け答えになっていたら、イエスの愛はそんなもの？という疑念がわきます。それじゃナザレの救い主でしょ、それで世界を救いえるの？イエスの愛はそんなちっぽけなものではなく、もっと大きいものじゃないのか。大きい小さいなどといえるような愛ではなくもっと別ものではないか。福音のしめす愛とはどんなものか、パウロのことは第二朗読 13:1 を聞いてみます。

たとえ、天使たちの異言を語ろうとも愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバルたとえ、山を動かすほどの信仰を持っていようとも愛がなければ、無に等しい。

もし、わたしたち一人ひとりの思い、ことば、行いに愛がなければどうなっているのでしょうか。わたしたちの生活に愛がなければわたしたちはどのようになっていたでしょう。わたしは、そしてあなたはどんな人間になっていたでしょう。わたしたちの生活の中には、かろうじて愛が残っています。しかしそれほど大きいわけではない、それほど立派なわけでもありません。けれども少しの愛が残っている、だからこそわかることがあります。愛がなければ、すべて空しいということ。イエスのことばはわたしたち一人ひとりの心の中の「小さな愛」を揺さぶります。

でも救い主に、あなたを癒さず、他の人を癒やす、このように言われて心がぐらつかない人などいないでしょう。自分の心の動揺ばかりか、それを言った相手に対して敵意を抱くかもしれません。なぜ、自分が癒されるのではなく、他の人なのか。なぜ、自分は救い主から見放されているのか。このわたしの小さな愛は、何のためにここまで頑張ってきたのか。なぜ、報いを受けられないのか、なぜ、他人が癒されて、わたしではないのか。

やがて、小さな愛は怒り始める、暴れ始めます。なぜ、なぜ。

・・・最後は、イエスを町の外へ追い出し、山の崖まで連れて行きそして、突き落とす・・・

わたしたちは小さな愛にとどまっているだけではイエスの教えを受け取った
とはいえないのでしょうか。怒りが殺意に変わった故郷の人たちの間を通り抜
けてイエスはエルサレムへの道を歩まれます。癒されるよりも、癒すことを
望むイエスがそうしておられるので、わたしたちもそうすることを望みます。
人びとの間を静かに立ち去って行かれるイエスの後姿を見送るのではなく、
たとえ、どんなに遠く離れていてもその影を追いかけます。
